大隈伯の美術談

× × ×

△美術も時代に伴はねばいかん、上が下を壓迫した時代には、人間も段々小さくなつてゆく、建築も段々小規模になつてゆく、高い家を建てゝはゆけぬの、大名の行列には土下座をしろのといふ風に押付るから、萬事が四疊半式になつて仕舞つた。

△古代は、モツト家なども大規模であつたに相違ない。茶の湯なんといふものも、太閤は大廣間でやつたものだらう、貧乏人が眞似をするやうになつて、追々、セセツコマしい四疊半だの、三疊だの、二疊だのといふ風になつたのだ。

△これ迄はそれでも可いだらうが、是からはいけない、女なども昔しから見るも背が高くなつてゐる、外國人と交際するやうになると、自然鴨居を高くする、床の間なども廣くなる、部屋も大きくなる、それを飾る美術品も大規模でなくてはいけない。

△家が大きくなるに連れて、是迄の懸物など、小さ過て不調和になつて仕舞ふ。美術家も時代に連れて、建築に適するやうな製作をするがよからう、いつ迄も四疊半式は感心せん。

△吾輩は、骨董いぢりをする程の、金も無し、暇もない、從つて趣味も無いから言ふのではないが、今の世の華族とか金持とかは、自分でばかり樂しんで、公衆と共に樂しむといふことをしない、天下の美術品も藏の中へ仕まい込んで置く、

△隨分大名の家などには、目錄丈けは立派なものがある、昔しは立派なものが在つたのだらうが、いつか贋物とすり替へられて、詰らぬものを大切に持つてゐるものも少なくない。

△アメリカの金持は、澤山美術品を買込んで、好きなものに見せる、その上自分が死んだ後は、ワシントン政府に寄附するといふのだ、それも、入物を作

中村不折氏

る金迄も共に寄附するといふのだ、日本にはそんな人はない、無暗に金をこしらへては、道樂息子に獻上して仕舞ふのだ。

△日本の政治でも實業でも軍事でも工業でも、何でも、西洋人が各國競ふて研究しやうといふやうなものは一つもないが、單り美術丈けは何處の國でも日本に向つて研究的にやつてゐる。

△現に今アメリカから若い女の美術家が來て、頻りに日本の美術を研究してゐる、大學も卒業した女で、哲學も可なり深くやつてゐる、先頃帝國ホテルで講話をやつたが、美術史なんかもよく調べてゐる。

△他の事は言はぬが、美術家の研究の態度などは、ドーも西洋人の方が日本人よりは熱心であるやうだ、特に獨逸人はエラヒと思ふ。各國で日本の美術を研究する熱心に對しても、日本の美術家は一奮發ありたい。

△吾輩は、維新時分に美術品の破壞をやつたものだ、好んでしたのではないが、時世で詮方がない、其罪滅しに、吾輩も少しこの方面に盡すかな。

伊太利の旅〔一〕

岡　精一

何か少し書いてくれぬかとの大下君の依賴を受けたのは最早一二箇月前であつたと思ふ、其時は別段に考もなかつたが、まだ時日もあるからと承知して置いたが、這度再度このお話の出た時は五六日の中に往くからといふことだから、今更の樣な心地で少し困つたが、約束は反古にも出來ぬと古い〳〵旅行談を書き付けて其責を塞ぐことに極めた。

事の起り、即ち旅行の相談は、明治三十八年の盛夏で、場所は巴里市のカルチエーラタンの余の畫室内である。相談せし人々は總計三人で、沼田一雅氏、下村觀山氏及予等である、三人寄れば必らず我師ありといふ諺もある、況んや同行を約したる兩氏は、彫刻家、畫家として、美術界に師表たるべき人々だ、けれど稀に赤毛布的錯誤は仕出來しながら、氣が付かずに濟まして居る場合もある、偶々是等の四九尻を發見することも有つたが、或時は言語不通と胡魔化し、又或場合には知らぬ眞似して打過ごした事もある、尤も個樣な事は、吾々三人の旅行に限られた譯ではなく、紳士として社會に重要視せられて居る人々にも隨分有つたものだから、吾々の專賣といふ銘打つて自慢する程の愉快なる手古摺りも無かつた、が、兎に角予も亦兩氏を學んで種々の四九尻をしたといはふか、否寧ろ予輩有つたが爲に兩氏にまで錯誤を招かしめた場合が多かつたであらふ。

八月廿日　晴

吾が同行三人は、前の約束を踐んで、同夜午後十一時半ガール・ド・ノール停車場出發、利榮壽に開催中の萬國博覽會を見物する目的で、各自發車前に到着した、此旅行が何となく愉快な心地がする故か、同行三人自ら欣々然として居る。其中友人等は、續々此行を送らむとて來會せらる、即ち明治七八年以降の